

人畜死傷

新大橋向、御船藏前町、六間ぼり、森下町邊燒失、長七町餘、巾平均二町半程、

本所綠町より、堅川通、中の郷、五の橋町邊燒失、長六町餘、巾平均三十間程、

南本所石原町法恩寺橋まで龜戸町燒失、長一町廿間餘、巾平均十二間程、

南本所荒井町、北本所番場町の邊燒失、長三町餘、巾平均廿五間程、

中の郷成就寺向、小梅町元瓦町の邊燒失、長五十間程、巾平均八間程、

以上江戸燒亡場所、合凡長二里十九町餘、幅平均して二町程と聞り、

三日朝五時過にいたり、諸方の火やうやく鎮れり、

〔續日本紀十一〕聖武天平六年四月戊戌日七 地大震、壞天下百姓廬舍、壓死者多、山崩川壅、地往々折裂、不可勝數、

〔日本紀略六〕貞元元年六月十八日癸丑、申刻地大震、中今日清水寺地震之間、縑素壓死之者、其數五十、

〔内宮子良館記〕今度大地震ノ高鹽ニ、大湊ニハ千間餘人五千人計流死ト云々、其外伊勢島間ニ、彼

是一萬人計モ流死也、明應七年戊午八月廿二日ノ事也

〔後法興院記〕明應七年八月廿五日己丑、辰時大地震、去六月十一日地震一倍事也、九月二十五日傳

聞去月大地震之日、伊勢、參河、駿河、伊豆、大浪打寄、海邊二三十町之民屋、悉溺水、數千人沒命、其外牛

馬類不知其數云々、前代未聞事也、

〔落穂集追加三〕傳奏屋敷始の事

一問曰、尤其時代の義は、諸事に付御手輕き事共と相聞けれ共、御老中方を初め、何も御立合、御評

定所へ茨原町の傾城ふぞいの者を俳徊有之事、何共承知致さぬ事也、虚説などにて無之哉、答曰、

手前抔も、寛永年中出生の者なれば、時代も違、慥に可知様も無之候、去ながら左様成る義も可有